

## (地理) 傾向と対策

### 傾向

**どの日程でも地形図は必須！共通テストで求められる前提知識が形を変えて出題されていると考えよ**

#### ①出題形式

かつては大問が4題あり、うち2題が地誌という「地誌重視型」であったが、2024年以降、全日程で大問が3題となった。小問は従前より31～35問であり（R方式は25問前後）、制限時間（60分）内で終了できる余裕はある。立正大学では解答方法はすべてマーク式であり、用語を書き込むことや長い文を論述することはない。択一式のため、文章題は共通テストのように四肢択一がほとんどであるが、中には五肢択一以上の形式もみられる。

#### ②出題内容

出題構成は、いずれの日程も概ね共通しており、以下の通りである。第1問が「地形図」を中心とした「地域調査」分野である。河川の流域面積を比較させたり、尾根・谷の理解を問う問題が比較的多く、また、地図の縮尺を計算させたり写真から見た方角を地図上で問う問題もみられる。第2問が農業・エネルギー・人口・都市などの典型的なテーマのいずれか。国別の貿易品目・貿易相手国、エネルギー産出量、農産物生産量などが題材となっているが、多くは『世界（日本）国勢図会』『データブック・オブ・ザ・ワールド』を題材にしている。なお3月試験で、近年話題の「ホルムズ海峡」の位置を問う問題が出題された。第3問は地誌で、日程により東南アジア、アフリカ、南米などの地域について問われるが、中国や米国などの大国はそれだけで大問1問を構成することもある。内容的には高校の「地理総合」「地理探究」を素直に踏まえた出題で、奇をてらった分野からの出題はほぼ無い。

#### ③難易度

第1問の「地域調査」がもっとも難しいかもしれない。単問としては難解ではないけれど、上記した内容に対応するには、普段から地形図演習をやらず、「本試験で何とかなるだろう」と考えているだけでは解答困難である。第1問では、高校「地理総合」で学習必須となった自然災害に関する出題も含まれていることもあり、地形についてのしっかりした理解が問われているのだろう。一方で、第2問「系統地理」は高校の学習内容を踏まえたポピュラーなレベルで、共通テストを受験する受験生にとっては、プラスαな知識はそれほど必要としない。第3問「世界各地の地誌」は、日程によって難易度に多少のバラつきがあるが、だからといって自己の受験日によって第3問対策を変える必要はないだろう。なお、R方式の第1問と第2問は、他の日程より平易に感じ、第3問についてはやや難

解な印象を受けた。

## 対策

### **共通テスト後に、地形図問題の演習をこなし、直前まで統計データを叩き込め！**

地形図にせよ地誌にせよ、全体的に良問が多く、立正大学以外の、たとえば駒澤大学や東洋大学、法政大学を目指している人も、立正大学の過去問を解くことをお勧めする。また、現在の共通テスト地理は、決して一問一答みたいなシンプルな知識を問うような問題が少なくなったとはいえ、解答に導くのに必要な前提知識は得ておかなければならない。そうした“前提知識”こそ、立正大学の問題で必要とされ、決してヤマを張ることなく、高校「地理総合」「地理探究」全範囲を広くおさらいしてほしい。もっとも、共通テスト本試験から本学の一般選抜入試までには3週間前後の期間が存在するので、受験生はその数週間でラストスパートをかけて知識の整理・上乘せをするのが必要と考えなければならない。具体的には、①地理学習の基礎的用語（「人口オーナス」「水平・垂直貿易」など）を総ざらいする。②高校などで入手した「統計集」を引っ張り出して、農産物やエネルギー、工業製品の生産・輸出ランキングデータを眺め、日本をはじめ主要国の貿易相手国や輸出品目をできるだけ叩き込んでほしい。また、③大問1対策として、できるだけ地形図の問題演習をこなすことが望ましい。それも、縮尺や距離・時間を計算させる問題を解き、共通テストであまり問われない「地図の種類（メルカトル図法や正距方位図法など）」「時差」なども学習するのがよいだろう。なお、第3問でも気候の知識が問われたりするが、グラフに対応する場所を当てはめる典型的なタイプで、それもハイサーグラフではなく、雨温図を手がかりにする出題がほとんど。場所としては、世界では【西海岸－内陸－東海岸】、日本では【日本海側－内陸－太平洋側】という3つの場所を題材にすることが非常に多い。共通テストでも典型的な出題パターンなので、過去の気候問題をピックアップして解き慣れて欲しい。